

サクラマスの水揚げに大いに期待！ ～平成24年度サクラマス幼魚（スマルト）放流式～

6月7日（木）、老部川内水面漁業協同組合（坂本石蔵組合長）のサクラマスふ化場で、村内各漁協をはじめ県・村関係者等60名出席のもと、サクラマス幼魚（スマルト）放流式が行われました。

この放流事業は、主に沿岸海域でのサクラマスの水揚げ増大を図ろうと、昭和60年のサクラマスふ化場完成とともに毎年実施しているものです。

今回のサクラマス幼魚（スマルト）は、平成22年8月中旬から10月上旬にかけて老部川に遡上した親魚と池産系の親魚から採卵し、ふ化してからおよそ1年7ヶ月間飼育した、平均尾叉長13.3センチ、平均体重24.8グラム程度の幼魚20,117尾が放流されました。

なお、今年は幼魚67,831尾、稚魚466,000尾の計533,831尾を、村内の小河川や近隣市町村の河川などに放流する予定となっています。

昨年、新たに完成した養魚池でも稚魚を飼育しており、今後も継続的にサクラマス幼魚や稚魚放流を実施することで、沿岸海域での水揚げと河川回帰の増大に、大いに期待がもてるものと思われます。



関係者による放流



放流されたサクラマス幼魚（当日の水中写真）

東通村漁業連合研究会「スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」を開催

5月29日（火）、村体育館において、村漁業連合研究会（三國孝司会長）主催による「平成24年度スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」が行われました。

約40名が参加した今回の研修会では、講師の地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所 漁場環境部 主任研究員 清藤真樹氏から近年の漁獲動向や水温分布に基づく漁況の見通しについて講演がなされました。

清藤主任研究員によると、本県周辺における漁況の見通しは、次の通り予測されるとのことです。

- ・本県周辺海域では、冬生まれ群の資源量に強く影響される。
- ・資源量は昨年より増加し、水温は平年並みで、水温による漁獲への影響は少ない。
- ・日本海側では水温分布から拡散型になり、沿岸では薄い漁場になる可能性がある。
- ・太平洋・津軽海峡では資源量が昨年より増加することから、昨年を上回る漁獲となる見通しである。

参加者は「昨年を上回る」という今年のスルメイカ漁に安堵の表情を見せながらも、真剣に耳を傾けていました。



挨拶をする三國會長



講師 清藤真樹主任研究員